
暗闇からのキボウの歌

すかぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗闇からのキボウの歌

【Nコード】

N2829Y

【作者名】

すかぶ

【あらすじ】

あやなき(いづき)綾崎紅騎は突然トラックにはねられて死んだ。

死んだはずの紅騎が目覚めた世界は死語の世界だった。

紅騎はある人物の思い出だけ欠けていた。それも大事な人の記憶だった……

人気アニメAngel Beats!の二次創作小説となっています。

岩沢×オリ主とベッタベタですが、楽しんでいただけたらうれしいです。

※注） かなり原作とは違いますのでその点はお許しを。

無力

「一枚、二枚・・・」

俺はいま万札を数えている。

「・・・よし、ちゃんと三十万あるな」

なぜかって？それは今日はアイツの誕生日だからな。

アイツはギターをやっている。

腕はかなりの物で時々俺と弾き合ったりもする。

かくいう俺もギターに没頭している人間の一人だ。

俺もアイツもバンドを組んでいないので周りからは不思議な目で見られることもある。別に気にしてないしバンドにも興味ない。

アイツもあまりバンドには興味ないらしい。そんなだから通じ合うところもあったのだろう。

俺とアイツは普通に恋をして付き合って普通の恋人同士のような毎日を送るはずだった。

・・・けれどアイツは三日前に死んでしまった。原因は脳梗塞だそうだ。

アイツが脳梗塞で倒れて死ぬまで一ヶ月もあったのに見舞いの一つも行ってやれなかった。

俺の少ない人間関係じゃ三日前にアイツが死んだことを知るのが精一杯だった。

だから俺は、アイツが気になると言っていたギターを買ってやろうと決心した。

『お前、何か欲しいも乗ってあるか？』

『うーん・・・特には』

『そう言うなって、一つくらいあんだろ？』

『・・・私は・・・お前が側にいてくれれば何もいらないう・・・』
『え？今なんて行った？？』

『な、何でもない！あ！あれだ！前紅騎と一緒に見に行ったギター！』

『ああ・・・あれか、けどかなり高かったぞ・・・俺たちには手の届かないくらい・・・』

『・・・だから何も無いっていったじゃないか』
『んゝ・・・そっかあ』

せめてもの償いに・・・

「すみません・・・」

俺は急いでアイツが眠っている墓へ向かった。

アイツの両親は連絡をしても身元の引き取りを拒否したらしい。

だからアイツは死んだ病院の近くの墓に埋葬された。立ち会ったのは担当の医者だけ。

俺は許せなかったアイツを見捨てた両親を、アイツの夢をいとも簡単に切り捨てた神様を。

最後まで何もしてやれなかった自分自身を。

俺は無我夢中で走った。一秒でも早くアイツに会いたかった。

キイイイイイ

「・・・え？」

雨が降って濡れた路面。

霧によって悪くなった視界。

酒に酔った運転手。

「・・・岩・・・沢」

ぐしやあ・・・

俺は何の抵抗も出来ずにトラックの下敷きになった。

無力（後書き）

少しずつ、確実に更新していきたいと思えます。
応援よろしくお願いします。

死後の世界（前書き）

楽しんでいってください

死後の世界

「・・・はっ！」

ここはどこだろう？

確か俺は・・・トラックの下敷きになって・・・

俺は死んだのか・・・

「じゃあアイツもいるのか」

・・・アイツ？アイツって誰だ？そもそも俺はなんでトラックの下敷きに？

「・・・くっ、思い出せない」

「何が思い出せないのかしら？」

振り返ると3メートルほど先に銀髪の少女が立っていた。

「・・・だれ？」

「名前を聞く前にそちらから名乗ったらどう？」

それもそうか・・・

「俺は綾崎紅騎^{あやざきこうき}。ここはどこなんだ？俺は生きてるのか？」

少女は無表情で答えた。

「ここは死後の世界。あなたはもう死んでいるわ」

やっぱり俺は死んだのか。でも本当に死んでるのか？脚はちゃんと生えてるし心臓も動いている。

「教えてくれ、俺は本当に死んだのか？」

少女の口元がかすかに動いた。

「hand sonic」

少女の腕から刀身が形成され少女がかがんだと思うと、いつの間にか距離がゼロになっていた。

「教えてあげる」

ドシュッ

「ぐ・・・はぁ・・・」

心臓を貫かれた。

一気に視界が狭まり後はただ暗闇だけが広がっていった。
「ったく・・・なにやってんのよコイツは」
そんな声を聞いた気がした。

死後の世界（後書き）

忠実なようなそーじやないような・・・
曖昧ですみません・・・

戦線前線基地（前書き）

ここは結構忠実になってると思います。
それではどうぞ！

戦線前線基地

「んっ……まぶし……」

目元に強い日差しを感じて俺は目を覚ました。

二つ並んだ白いベッド、独特の消毒の臭い、ここは保健室か。

「……そうだ、俺は心臓を刺されて……」

刺されたあたりのところを触ってみるが傷一つ着いてない。

本当は刺されていないと思ったが制服にくっきりと刃物で刺したような穴が開いていた。

「いったい何だったんだ……」

「あ、気がついたみたいね」

一瞬警戒したが昨夜の少女じゃなくて少しほっとした。

「だれだ？ アンタは……」

紫の髪と目立つリボンが印象的な女の子だった。

「俺は綾崎紅騎、アンタがここまで運んできたのか？」

「わたしはゆり。そう、わたしが運んだわ」

だとすると見かけによらずかなり力があるみたいだ。

「そうか……それはありがとうな」

「ありがとうついでに頼みがあるんだけど……」

ゆりがこちらに顔をぐっと近づけてきた。

「紅騎、あなた戦線に入らない？」

「せ、戦線？」

彼女はかなりの近距離で話していることに気づいているのか？

「そう、死んでたまるか戦線。まあここじゃなんだし基地に来なさい！」

この様子じゃ気づいてないようだ。

「基地？ そんな物があるのか？」

「つべこべ言わず着いてきなさい！」

強引にベッドから引きずり下ろされ俺は西部劇の引きずり回しのよ

うに連れて行かれた。

前線基地、校長室に着いたときにはとっても悲惨な姿になっていたのは言うまでもない。

「川」

・・・川？

そう言ってゆりは校長室の扉を開けた。

「みんな新しいメンバーを連れてきたわよ」

中には女が二人と男が三人（内一人はソファで気絶している）がいた。

「おゝゆりっぺ、また連れてきたのか？・・・おおっ、二日連続で穴あき学ランとは」

「まあ、そう言わないの」

青い髪の男、日向は俺に手を差し出してきた。

「俺は日向、まあ仲良く行こうぜ」

「ああ、こちらこそよろしく」

俺も日向の手を握った。

「んん・・・ここはどこだ？」

さっきまでソファの上で気絶した男が起きたらしい。

「お、そっちの奴も起きたみたいだぞ」

「ちようど良いわアンタも戦線に入りなさい」

「戦線？」

男はだるそうな体を起こして聞き返してきた。

「そう、死んでたまるか戦線。んゝなんかしっくりこないわねゝ」

「じゃあこんなのはどうか？走馬燈戦線」

「それ死ぬ寸前じゃない！」

「じゃあ死にものぐるい戦線」

「必死過ぎじゃない！」

「四面楚歌戦線」

「死なすわよ！」

ことごとく日向の意見は没になっていく見てて痛々しいほどに。

「じゃ、じゃあここは新入りに聞いてみようぜまず紅騎から！」
いきなり俺に降ってきた。

「お、俺？」

「どうなのよ？」

ギンと睨まれた。おおこええ・・・

「ゆりっぺ戦線」

「殺す！」

ひいいい！

「お、落ち着け！じゃあ今度はお前！」

さっきまでぼーっとしてたもう一人の新人？が面倒くさそうに答えた。

「勝手にやってろ戦線」

するとずっと黙り込んでいたばかりでかい斧を担いだ男がつかかってきた。

「貴様、ゆりっぺに生意気な口を！もう一回切り刻んでやろうか！？」

大分短気な男だな・・・

「勝手にやってろって言ってるんだろ！？俺にかまうなよ！おれはすぐに消えるんだよ！」

おお、コイツもかなりの短期だ。

「消える？・・・まあ運良く来世で人間になれたらうれしいでしょうね」

「どういう意味だよ」

ゆりは小さくにやりと笑うと続けた。

「ちょうど良いわ紅騎、あなたも聞いてなさい。」

「お、おう・・・」

すると周りが暗くなりスクリーンが降りてきた。

「二人とも分かっているだろうけどここは死んだ者が集まる世界よ。現世と来世の中間と言ったところかしら。ここで消えてしまうと来世は人間以外のものに魂が転成するかもしれないのよ」

タイミング良くスクリーンに様々な動物の画像が流れる。全部節足動物系なのはあえて黙っておこう。

「そこでわたしたちは戦うことにしたの戦ってこの世界を手に入れるのよ!」

今度は節足動物から一人の少女の映像に切り替わった。

無表情で金色の瞳、透き通るような肌輝かんばかりの銀髪。

昨夜俺の心臓を貫いた張本人だ。

隣の新入り二号（仮名）も同じような表情をしている。

「これが私達の敵”天使”よ。こいつを倒してこの世界を手に入れるの!」

スクリーンが戻され部屋が明るくなった。

「改めて聞くわ戦線に入ってくれない?」

最初に口を開いたのは新入り二号（仮名）だった。

「少し考えさせてくれるか?」

「いいけどこの部屋以外でね。」

どういう意味だろう・・・新入り二号（仮名）は悔しそうな顔を浮かべているが。

「分かった。合い言葉は?」

観念したように了承した。

「紅騎、あなたもよ」

俺か・・・まあ、行く当てもないし断る特別な理由もないし。

「俺も入るよ、死んだ世界戦線に」

「いいわね、その死んだ世界戦線って。よし採用!」

ゆりはぐっと親指を突き出した。

片思いな再会（前書き）

ここからぐつとオリジナル臭が漂ってきます。

片思いな再会

「それじゃここにいるメンバーだけでも紹介するわね。彼は日向君。その横が野田君バカっぽいけどバカよ」

日向が苦笑する。野田の方は別に気にした様子は見せていない。

「その隅っこにるのが椎名さんで、そっちにるのが岩沢さん、彼女は陽動班のリーダーなの」

岩沢だったわけ？がこちらをじっと見つめてきた。俺の顔に何か着いているかな？

「そしてわたしがゆり、戦線のリーダーよ」

「俺は綾崎紅騎だ。」

「俺は・・・音・・・無・・・？」

「音無か・・・記憶がないパターンはさほど珍しくない。まあ時期に思い出すさ。」

日向が音無の肩をぽんと叩いた。

「じゃあ、音無君はわたし達と実際に行動する方に入ってもらおうわ。綾崎君は岩沢さんの陽動班に入って」

「ん？俺が陽動班？なんで？」

「だってさっきから岩沢さん綾崎君の方をずっと見てるんだもの。」

岩沢さん、気に入ったの？」

岩沢さんは黙って俺の方に近づいてきた。

「綾崎・・・紅騎・・・なのか・・・」

「そ、そうだけど・・・岩沢さんだっけ？俺の顔に何か着いてる？」

その瞬間岩沢さんは驚いたような表情を見せ、うつむいたかと思いきり俺に平手打ちをしてきた。

バシン！！

「・・・馬鹿！！」

そう叫ぶと岩沢さんは校長室、もとい前線基地から飛び出していた。

一瞬しか見えなかったが岩沢さんは泣いていた。

「・・・あゝあ紅騎、初日から女を泣かせやがって」
日向あきれたような顔をしていた。

「・・・浅はかなり」

ここにきて初めて椎名さんの声を聞いた気がする。

「・・・で、綾崎君、岩沢さんとは生きていた世界からの知り合い？」

俺が死後の世界に来てまだ一日もたっていない。それに岩沢さんとは初対面だ。

つまり生前岩沢さんと会っていた事になるのだが・・・

「分からない・・・というより思い出せないんだ・・・」

「何だ、お前も記憶がないパターンか？」

いや、生前のだいたいのは覚えている。生まれたときから死ぬまで。

・・・けど何かが引っかかる。

「分からない・・・分からないんだ・・・」

「それじゃあ今日は解散よ、綾崎君はちよっと残って」

「・・・はい」

片思いな再会（後書き）

・・・まあこうなるのは必然的でしたね。
今後どう書いていくか楽しみです。

屋上（前書き）

それではどうぞ

屋上

俺とゆりは学校の屋上にいる。あたりはあかね色に染まり、校庭では野球部がグラウンドの整備をしている。

「・・・まずは、あなたと岩沢さんの関係について教えてちょうだい」

やっぱりそのことか・・・

「そんなに気になるのか？」

「そりゃそうよ。いつもクールで我が道を進んでるって感じの岩沢さんが、あんなに感情的になるなんて。ちよつとした事件よ」

そうだったのか。それなら聞きたがる理由も納得がいく。

・・・だけと思いい出せない。どうしても。

「さっき言ったとおり本当に分からないんだ」

「一つも？」

「ああ、だけど生前の記憶ははっきりしているんだ。どこで生まれたのかどうやって死んだのか」

「そう・・・じゃあどんな未練を残して死んだの？」

未練？現世での未練か・・・

俺は思いい出そうとする。必死に、どんな些細なことでも逃そうとせずに。

すると激しい頭痛がしてきた、手足が震えて寒気がした。なぜか涙まで出てくる。悲しくなんか無いのに。

「ご、ごめん・・・無理に思いい出させようとして・・・」

ゆりはポケットからハンカチを取り出した。ふけというのだろう。

「いや、かまわない大丈夫だ」

俺はその手を少し乱暴に払った。

「・・・でも」

「少し一人にしてくれ・・・まだ死んだって実感できそうにないみたいだ」

俺は嘘をついた。もうとっくに死んだことは受け入れている。ただ同情をされて欲しくないだけだった。

「分かったわ・・・気が向いたら第二講義室に行ってみて」

「ああ、気が向いたらな」

ゆりは屋上を後にした。

・・・さて、どうするか。

日が暮れ始めているが、寮に帰るには少し早いみたいだ。

「第二講義室か・・・」

確かそう言っていた。気が向いたら行ってみろと。

やることもないし行ってみるか。

屋上（後書き）

今回はちょっと短めです。
次回をお楽しみに。

G i r l s D e a d M o n s t e r (前書き)

それではどうぞ。

Girls Dead Monster

「第二講義室・・・は、ここか・・・」

多少迷いながらも何とかゆりに言われた教室に来ることが出来た。

「ゆりに道を聞いておけば良かった」

中では女の子四人が演奏をしていた。見た感じバンドのようだった。かなり防音設備が良いのか少しの音しか漏れてこない。

「・・・さて、どうしたものか」

四人の中に見たことのある顔があった。さっき思い切りビンタをかましてきた張本人岩沢さんだ。

「・・・とりあえず事情を話すか」

合う度にビンタを食らってはおれの顔が持たない。

ちょうど演奏が終わったらしい、俺に気付いたらしくポニーテールのギターを持った女の子が扉を開けてきた。

ガラ・・・

「さっきからいるようだけど何の用？」

・・・気のせいだろうか。岩沢さん以外の三人から睨まれている気がするのだが・・・

「あ！確か新しく戦線に入った二人の内一人ですよ」

ドラムを叩いていた女の子が思い出したように話した。

「するとこの人が噂の岩沢さんを泣かせた人ですね！？」

「・・・」

すると、岩沢さんは無言で立ち上がりそのまま教室を出て行った。

「あっ、どこに行くんだよ！」

俺は岩沢さんを追おうとしたが教室を出る前にガシッと両肩を掴まれクルッと後ろを向かされた。

真正面に獲物を捕まえた蛇のごとく目をギラギラさせた三人が並んでいた。

「さっして・・・詳しく聞かせてもらおうじゃないシンイリクン」

終わった。絶対に死ぬよ。もう死んでいるが殺される……
「ギャアアアア!？」

「……やれやれ」

俺が解放されたのはきっちり三人分殺された後だった。

もちろんその後ちゃんと事情は話した。一部分の記憶が消えていると。

三人は一応納得してくれたが、またすぐに顔色を変えて俺を追い出した。

「だったら早く誤解を解いてこい!!」

だから俺は最初からそうしようとしていたんだって!!

「どこ行っただろうな……」

いまいちどこに何があるのか分からないので学校中を歩き回るしかなかった。

あたりはすっかり日が暮れて人気も少ない。

だからはっきりと聞こえてきた。あれはギターの音だ。

「屋上か……」

俺はすぐに屋上へ向かった。

屋上に続く階段を上って扉を開けるとやっぱりいた。

岩沢さんはベンチの上でギターを弾いていた。

歌詞もないしメロディーも単調で、あまり曲とは言いにくい。ただの音の集まりみたいだ。

「何しに来たの？」

先手を打たれた。俺は戸惑いながらも隣の二つ目のベンチに座った。

「いや、ちょっと岩沢さんが誤解をしているみたいだからさ」

すると岩沢さんはギターを引く手を止めた。

「私は誤解なんてしていない。お前は綾崎……紅騎、紅騎なんだ

ろう？」

やっぱり俺のことを知っているのか・・・俺の知らない記憶を・・・

「私だ！岩沢、岩沢まさみだ！」

立ち上がって必死に訴えるが俺は戸惑うだけだ。すまない気持ちでいっぱいになる。

「ちょっと落ち着いてくれ！岩沢さん！もう少し冷静になって」

岩沢さんはハッと我に返ったような顔をしてベンチに腰を下ろした。

「・・・すまない。取り乱して」

二度三度深呼吸をしてようやく落ち着いたらしい。

俺は一つずつ確かめるように質問をした。

「岩沢さんは生前の記憶がはっきりしている？」

コクッ・・・ゆっくりとうなずいた。

「俺のことを生前知っていた？」

コクッ・・・またうなずいた。

「じゃあ、俺がどう死んだのかは知ってるか？」

フルフル・・・今度は首を横に振った。

ということは岩沢さんが先にこの世界に来たって事か。

「いつ頃この世界に来たの？」

「一ヶ月前・・・」

って、この質問は重要じゃないか。

「今度は私から質問して良い？」

完全に落ち着いたらしく岩沢さんはじっとこちらを見た。

「どこで生まれたのか覚えている？」

俺ははっきりとうなずいた。

「アンタは生前何をしていた？」

これは覚えている。俺はちっちゃいライブハウスでバイトをしていた。た。

そしてギターもやっていた。

「ライブハウスでバイトをして・・・ギターをやっていた」

「誰と？」

・・・誰と？俺はバンドをしていたのか？

いや、俺はバンドにはあまり興味が無かったはずだ。

じゃあ、特定の誰かと二人でやっていたことになる。

・・・だめだ、思い出せない。

「・・・分らない」

「本当に思い出せない？」

「ああ・・・」

岩沢さんは妙にすっきりとした顔で笑った。とても悲しそうな笑顔だった。

「そっか・・・特定の記憶だけが無いみたいだね。アンタも苦労だね」

するとベンチから立ち上がりスツとこちらに手を差し出した。

「私がアンタの記憶を取り戻す手伝いをしてやるよ。その代わり私達のバンドに入ってくれないか？」

交換条件か。悪くない。俺も生前はギタリストだったんだ。

「むしろこっちからお願いしたいよ。」

俺は岩沢さんの手を握った。思ってたよりもずっと小さくて柔らかい手だった。

「よろしく、岩沢さん」

「・・・よろしく、綾崎」

G i r l s D e a d M o n s t e r (後書き)

これedyouやく物語が一步進めました。
これからどういう展開にしようかな・・・

a n o t h e r v i e w 岩沢 〱 (前書き)

六話の岩沢視点です。

another view（岩沢）

最初会ったときは驚いた。

しょうがないだろう？またあえるなんて思いもしなかったんだから。ここに来たって事はアイツは死んだってことだ。

アイツが死んだって事実は残念だったけどまた会えたうれしさの方が大きかった。

・・・だけどアイツが私と顔を合わせても表情一つ変えない。

まるで、赤の他人を見るような目だ。

記憶が無いってパターンはここではよくある話だったから。アイツもそれかなって思った。

けどアイツは自分の名前をフルネームで言えた。記憶が無い奴独特の雰囲気は無い。

それじゃあなんで？なんで私に気がつかないんだろう。

顔がよく見えないのかと思ってできるだけ視線を合わせてみる。

アイツは私が見ていることに気がついたようだけど、不思議そうな顔をするだけだ。

しょうがない、こっちから声をかけてみよう。

「・・・だって岩沢さん、さっきからずっと綾崎君の方ばかり見てるんだもの。」

ちようどゆりが私の仕草に気づいたみたいだ。私はそのタイミングでアイツに声をかけた。

「綾崎・・・紅騎・・・なのか？」

もっと気の利いた言葉があるだろうが、こう言うのが精一杯だった。少し緊張しながらアイツの言葉を待った。

けどアイツは。

「岩沢さん・・・だっけ？俺の顔に何かついてる？」
その瞬間私の頭の中の何かがはじけた。

「・・・馬鹿！」

気がついたら私はアイツをひっぱっていた。

悲しくて、悔しくて、やるせなくて、何が何だか分からなくなっていた。

私は部屋から出て行きバンドメンバーが待っている第二講義室に走って行った。

ガラガラガラ！

「・・・・・・・・・・」

「い、岩沢さん！？どうしたんですか？」

私は入江の言葉を見無視してギターを持った。

私は無性に演奏したかった。音楽でこの気持ちを忘れたかった。

「・・・・・・・・ちょっとね」

無理に笑って見せた。後からひさ子に聞いたら思い切り目は泣いていたそうだ。

嫌なことは音楽で忘れる。これは私が生きていた頃から変わらないことだ。

・・・・・・・・でもだめだった。どうしてもアイツの言葉がまとわりついてくる。

「ストップストップ！！」

突然ひさ子が演奏を止めた。

「・・・・・・・・？」

「岩沢、調子でも悪いの？今日は全然集中できてないけど」

「・・・・・・・・ごめん」

個人的な感情で演奏を止めるなんて最悪だ。リーダー失格だ・・・

「戦線のミーティングで何かあったのか？」

ずばりの中だった。

「確か新しく二人が戦線に入るんだったっけ。もしかして前岩沢さんが言っていた生前の思い人が現れたとか！？」

グッサア！

関根の鋭い一言でノックダウンしそうになったが辛うじて踏みとどまる。

これも後でひさ子に聞いたことだけど、そのときかなり挙動不審だったそうだ。

「も、もしかしてど真ん中ストライクってやつですか？」

最後に入江からのとどめの一撃。

私は近くにあった椅子に座って小さくつぶやいた。

「・・・そうだよ」

「それって、さっきから中を覗いてるあの男かい？」

ひさ子がドアの方をちらっと見る。

そこにはアイツがとまどうような顔でこちらを見ていた。

「・・・」

「どうやらあたりみたいだね。・・・どれ」

ひさ子は早足で歩み寄って扉を開けた。

ガラガラ

「さっきから見えていたようだけど何か用？」

ひさ子は少し強めの口調で言った。

「あ、もしかして例の新人ですか？」

入江は気を遣ったようだけど全くフォローになっていない。

「ってことは、岩沢さんが前言ってた・・・」

私は教室を出て行った。

途中でアイツの悲鳴が聞こえた気がするけど、どうでもよかった。

今はとにかく一人になりたかった。

「・・・さて、どうしようか」

何となく屋上に来てしまったが気晴らしに何をしようか分からなかった。

妙に首が重いと思ったら私はギターを持ったまま外に出たらしい。仕方ない、何か歌うか。

さっき演奏していた曲から適当に選んで弾いてみる。

・・・途中で自然に止まってしまった。

「・・・やっぱりはたいたのは悪かったかなあ」

右の手のひらを見してみる。何も変化はないがじんじんしている気が

する。

「いや、アイツが悪いんだ。私は悪くない！」
もう一度手のひらを見してみる。

・・・けどやっぱりまずかったかなあ。

キィ・・・

突然屋上の扉が開いた。誰かが来たみたいだ。

気配でだいたい分かるアイツだ。

「・・・何しに来たの？」

ギターをベンチに立てかけた。

アイツは私の隣のベンチに座った。

・・・いつもなら隣に座ってくれるのに。

「いやあ、岩沢さんが何か誤解しているみたいなんで」

アイツはまた他人行儀の口調で話してきた。

・・・いつもなら私のことなんか気にかけてないような話し方なのに。

駄目だ、やっぱり我慢できない。

「誤解なんてしていない！お前は、紅騎・・・綾崎紅騎なんだろう！？」

私は叫んでいた。とにかく気づいて欲しかった。

「私だ！岩沢まさみだ！」

もう、無我夢中だった。

「お、落ち着いて岩沢さん」

「あ・・・」

そうだ、いくら私が叫んでも何も変わらないんだ。

「・・・すまない、取り乱して」

私はベンチに座った。何も考えられなかった。

「岩沢さんは生前の記憶がはっきりしている？」

突然の質問だったが話す気力はなく仕草だけで答えた。

コクッ・・・

「俺のことを生前知っていた？」

コクッ・・・

「じゃあ、俺がどう死んだのは知ってるか？」

フルフル・・・

知っているはずがない。私の方が先に死んだんだから。

ってことはアイツは自分自身がどうやって死んだのかは覚えているのか・・・

「いつ頃この世界に来たの？」

ようやくしゃべる気が戻ってきた。

「一ヶ月前・・・」

今度はこっちからも聞いてやろうじゃないか。

「今度は私から質問して良い？」

アイツははっきりうなずいた。

「アンタは、生前何をしていた？」

生前の記憶がはつきりしているならすぐに答えられるはずだ。

「ライブハウスでバイトをして・・・ギターをやっていた」

正解だ。じゃあ、覚えているんだな生きていたときのこと・・・

私は意を決して質問した。

お願い・・・

「誰と？」

するとアイツは苦悶するような顔をした。

お願い・・・

「・・・分からない」

お願い・・・思い出して・・・

「本当に思い出せない？」

なんで私の思い出だけ失ってるの？

「ああ・・・」

アイツは、本物のアイツだった。

だけど、私の事を忘れたアイツはアイツじゃない。

「そっか・・・特定の記憶だけが無いみたいだね。」

だったら、思い出させてやる。どんなに時間がかかっても。どんな

に苦しくても。

・・・もし私が消えてしまうようなことになっても。

「私がアンタの記憶を取り戻す手伝いをしてやるよ。その代わり私達のバンドに入ってくれないか？」

一瞬の一時だったとしても私はアイツに呼んで欲しい。

「むしろこっちからお願ひしたいよ」

私の事を岩沢じゃなくてまさみと呼んで欲しい。

あいつと握手をした。

懐かしい手の大きさと温もりだった。

「よろしく、岩沢さん」

そうしたら私も、綾崎じゃなくて紅騎って呼んでやる。

「・・・よろしく、綾崎」

a n o t h e r v i e w 〱 岩沢 〱 (後書き)

明日から二日間諸事情により投稿しません。
よろしく願います。

G i r l s ? D e a d M o n s t e r (前書き)

二日ぶりの投稿です。
それではどうぞ。

Girls? Dead Monster

「じゃあ、今日から私たちのバンドに入ることになった、綾崎紅騎だ」

翌日俺は正式にメンバーとして迎えられることになった。

意外にも全員俺が入ることに賛成してくれたらしい。一人くらいは反対する奴がいると思ったのに。

「綾崎紅騎です、よろしく」

・・・訂正一人いた。昨日俺を率先的に、てゅーかヤツ一人だけで三人分殺してきた女。確かひさ子って言ったけ？

が俺に思い切りガン飛ばしてきている。

・・・なんで？

「で、右からベースの関根。ドラムの入江。ギターのひさ子。」

「よろしくお願いします！」

「よろしくお願いします」

「・・・」

「ああ、よろしく」

うーん・・・思い当たる節がないぞ。

むしろこっちの恨みの方が大きい気がする。

「で、綾崎先輩は何ができるんですか？ギターですか？ドラムですか？キーボードですか？私から見るとギターっぽいですけど」

関根が間を開けずに一気に話してきた。

元気なのは分かったが、限度を軽く超えているぞ。

「ギターだよ。それでも生きてる頃は少しは有名だったんだぞ？」

今朝ゆりに無理を言って大急ぎでギターを用意してもらった。

俺が昔使っていたギターと全く同じ物だった。

ストラトキャスターの青系サンバースト。俺が初めて買ったギターでもある。

ゆりにギターの詳しい情報を書いて渡すとき頭の中にフッと別のギ

ターのイメージが出てきた。

そっちの方はだいたい形しか分からなかったから色だけ指定して俺のギターと同じ仕様にした。

もしかしたら失っている記憶の手がかりになるかもしれないからだ。

そのギターは俺の部屋にしまっておいてある。

「へー、バンドですか？」

入江も興味津々で聞いてくる。

「いや、ソロだ。地方のテレビで紹介されたこともあったけなあ」
確か路地裏のライブハウスだけにスポットライトを当てた番組だったはずだ。

俺はライブハウスのぴPRで二人で演奏させられた。

・・・誰とだったけ？

「確か岩沢もテレビに出たことあるって言ってなかった？」

ひさ子が岩沢さんに話をふった。

「うん、ある」

へえ、岩沢さんも出たことあるんだ。

「ただし、私一人じゃないんだけどね」

ん？一人じゃないって事は岩沢さんはバンドでも組んでたのか？

「え？それってそこにいる綾・・・」

サッ・・・

素早く岩沢さんがひさ子の口をふさいで押さえ込んだ。

ヒソ（その話は今するな！）ヒソ

ヒソ（なんで？アイツはお前の好きな男なんだろう？）ヒソ

ヒソ（なんで知ってるんだ？）ヒソ

ヒソ（言わなくても分かるよ。昨日の乱れ具合と今日の笑顔具合で）
ヒソ

ヒソ（な・・・！）ヒソ

なんで、ひさ子にはやついてるんだ？岩沢さんも動揺しているみたいだし・・・

ヒソ（と、とにかくそのことは後で話すから！今は綾崎と私の事については触れるな！）ヒソ

ヒソ（はいはい、分かったよ）ヒソ
ようやく二人は距離を取った。

何があったんだろ？岩沢さんは何か疲れた顔してるし。ひさ子はその凄いにやにやしてるし。

「あのく大丈夫でしょーか？」

「あ、ああ、大丈夫。じゃあ、綾崎、何か弾いて。」

いきなり！？何か弾けって何を弾いたら良いんだよ！？

「どうした？ああ、大丈夫。一曲聴けばだいたいの実力は分かるから」

何が大丈夫なんだろうか・・・

「えく岩沢は綾崎のレベルは知って・・・」

ギン！！

岩沢さんがひさ子の方をにらむ。

ひさ子は黙ったけどまだにやついている。

「アンタはちょっとは名の知れたギタリストだったんだろ？聞いてみたいんだよ。アンタの歌」

さっきのひさ子の影響か。岩沢さんは少しすねた感じの上目遣いで見てきた。

う・・・、ヤバイ。このギャップの破壊力はすごすぎる・・・

「わ、分かったよ」

これで断れるヤツがいたら紹介して欲しいぜ・・・

俺は生前よく弾いていた歌を思い出した。これなら暗譜でいける。目を閉じて深呼吸をした後、軽く指を鳴らした。ギターを弾く前の俺の癖だ。

四人は黙ってこちらを見ていた。周りはシンと静まりかえる。

俺はイントロを弾き始めた。単調な音の並びだが乗りの良い曲だ。

「え・・・」

「こ、これって・・・」

「Crow Song?」

「……」

俺は四人の驚いた表情を気にせず演奏を続けた。

最後の小節が弾き終わった。

のだけど。しばらく沈黙が続いた。

「えーと、皆さんどうされたのでございますでしょうか?」

「ど……」

ど?

「どうしてCrow songを知ってるんですか!?!」

関根が椅子からガタァ!と立ち上がってこっちに詰め寄ってきた。

「ど、どうしてって言われても……」

そういえば何で知ってるんだろう。

こんな曲歌ってる人が生前いたっけ?

「Crow songは岩沢さんのオリジナルなんですよ!」

そうか、オリジナルか!どうりで歌手名が出てこないはずだ。

「……え?オリジナル?」

岩沢さんの方を見るとまだ放心状態で岩沢さんは固まっていた。

「おーい、岩沢さーん。おーい」

関根が岩沢さんの顔の前で手を振った。

ハッ!?

……どうやら気がついたらしい。

「綾崎!なんで!?!どうしてCrow songを知ってるんだ!?!」

岩沢さんが俺の襟首をガクガクガクツと揺さぶってきた。

「分からない、分からないけど頭の中にフツと思い浮かんだんだ!」

「・・・そうか、分かった」

ようやく手を離してくれた。

「で？どうだった？俺の演奏は」

俺はギターをスタンドに立てかけながら尋ねた。

「え？あ、ああ、正直驚いた。こんなに上手かったなんて」

「そ、そうか？」

「・・・それに懐かしかったな・・・」

「うん？何か言った？」

突然岩沢さんの顔が赤くなった。

おお、すげえ、一気に赤くなった。

「な、何でもない！・・・私は十分合格だと思うんだけど。みんなは？」

「私も異議なくし！正直驚きました！これって岩沢さんと同じくらい上手くないですか！？」

「私も賛成です。・・・そうですね。同じ空気は感じましたけど・・・」

「・・・異議なし」

どうやら、合格なようだ。

「・・・というわけで合格だよ。綾崎は私と同じギターボーカルにしようと思うんだけど？」

三人は特に異論はないようでそれぞれ肯定的な仕草をしていた。

「じゃあ、正式にバンドのメンバーとして歓迎するよ綾崎」

・・・そういえば俺が入ったらGirls Dead Monsterはどうなるんだろう？

”Girls” だもんな・・・

まあ、何とかなるだろ。

「改めてよろしく。みんな」

晴れて俺は本当にメンバー入りを果たした。

G i r l s ? D e a d M o n s t e r (後書き)

名前の方は・・・まあ、おいおい何とかします。
それではまた次話！

歓迎会（前書き）

しばらく投稿できなくてすいません。

なにぶん学生の身分なもので忙しくて・・・

できるだけ毎日投稿できるように頑張ります。

それではどうぞ。

歓迎会

コツコツ・・・

「！」

サッ・・・

コツコツコツ・・・

「・・・ふゝ」

ソロソロ・・・

「そういえば生活科のあの教師がさゝ」
やばい！

どこか、どこか隠れるところは・・・

「そこだ・・・」

俺は近くの段ボールの中に隠れた。

「・・・あれ？なんかいいた？」

「まさかゝ気のせいなんじゃない？」

コツコツコツコツ・・・

あ、危なかった・・・

・・・この段階で俺が何をしているかわかったのだろうか。

俺は今女子寮に潜入している。

別に怪しいことをするつもりはない。断じてない。

ただ、練習後に歓迎会をするといわれて何の疑いもなく承諾してしまったのが間違いだったただけだ！

・・・普通気がつくよな。女子四人が男子寮に行くより男一人が女子寮に行くほうがリスクが低いわけだし。

だけど、あの時の俺は少し舞い上がっていたのかもしれない。

誰かに祝ってもらうなんて数えるくらいしかなかったもんな・・・
そんなこんなで俺は某、蛇の名前の軍人さんのごとく段ボールに身を隠している。

「・・・さあ、困った」

岩沢さんの部屋（歓迎会は岩沢さんの部屋でやる）はこの寮の最上階にありしかも一番奥の部屋らしい。

廊下までは影があって隠れやすいが、問題は階段だ。

エレベーターは使えないから階段で最上階に行くしかない。

しかし階段は隠れるような場所が無い。

だから必然的に段ボールをかぶって進むしかないのだ。

「よし、綾崎紅騎行きまゝす」

俺は慎重かつ迅速に階段を上った。幸い夕食時の時間なので人はいなかった。

「よし、何とかついた」

俺はドアに岩沢と書いてあるのを確認し、インターホンを押した。

ピンポン

・・・ガチャ

ガン！

「おぶう！！」

勢い良くあけられたドアが俺の鼻先にクリーンヒットした。

「よくたどりついたな綾崎・・・って、どうした！その鼻！」

どうしたって・・・あんたがやったんでしょうが・・・

「・・・いや、大丈夫だ」

なんとなく悪い気がしてその言葉を押しとどめた。

「そう、じゃあ入って。もうみんな集まってるから」

「・・・おじゃまします」

案の定関根と入江の鼻には絆創膏が×状に張られていた。

ご愁傷様です・・・

「それじゃ、始めようか。綾崎、飲み物は何がいい？」

「一応聞くけど、何があるの？」

「えーと、○ルヴィックと、ク○リスタルカイザーと、ペ○エと、

○ントリー天然水と・・・」

全部天然水じゃねーか・・・

「・・・なんでもいいよ」

「じゃあ、富○山のバナジウム天然水ね」

・・・もう、なんでもいいっす。天然水好きだし。

ちなみにほかの三人はペットボトルで自分の分を買ってきている。

「よし、じゃあ綾崎がうちのバンドに入るってことで・・・」

『かんぱーい!』

俺の歓迎会が始まった。

それから三時間後の午後十時

「おい、あやさきーちょおっと、面かしえやー」

・・・なぜだ、なぜ岩沢さんは酔っ払っているように見えるんだ？

「もしかして、岩沢さん酔ってます？」

「らーにいつてんだあ、わらしはーぜーんぜん酔ってらいぞー」

酔ってる人のセリフだ!?

「ひさ子・・・岩沢さん、何か食べた？」

「ん・・・」

ひさ子は奈良漬けを差し出してきた。

ほかにアルコールが入っているようなものは無い・・・まさか・・・

いや、確実に酔ってる。

「岩沢さん・・・めっちゃ酒に弱いじゃないか！」

「あー岩沢さん食べちゃいましたかー・・・あ、それダウトです」

関根が他人事のように言った。

「そうなたら岩沢さん大変なんですよね・・・じゃあ、5です」

入江も確実に他人事だ。

「じゃあ、この勝負に負けたやつが後片付け兼、岩沢の相手な・・・

綾崎、6だ」

・・・ひさ子の奴、楽しんでるな。クソッ俺がずっと全敗だからって。

俺の手札には6が2枚ある。

よし、勝負！

「・・・よし、受けて立つ。ひさ子、ダウトだ！」

「ふふふ、残念♪」

ひさ子が出したのは本当に6だった。

「・・・綾崎先輩、6はさっき私が1枚出しましたよ」

「・・・何！？」

・・・てか、なんで関根は分かったんだ？

「がばー♪」

突然岩沢さんが後ろから抱きついてきた。

「なんだ、さっきからわらしのころを無視して、ぎゅう」

岩沢さんはお構いなしに強く抱きしめてくる。

「ん、・・・なんだ、綾崎、手札に6と9しかないぞ」

「わ、言っちゃダメ、！！」

「ふっふっふ、・・・わらしを無視した罰なのだ」

・・・助けて、誰か、

結局また俺は最下位になってしまった。

歓迎会（後書き）

岩沢さんは酒にめっぽう強いイメージとすごく弱いイメージがあったので。

弱いイメージをとりました。

・・・いいなあ紅騎。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2829y/>

暗闇からのキボウの歌

2011年11月18日06時18分発行